



## 話題の本棚

古賀真輝著『数学の世界地図』

宇和川雄著『ベンヤミンの歴史哲学 ミクロロギーと普遍史』

## 特集／都市

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: [http://www.s-coop.net/about\\_seikyo/public\\_relations/](http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/)



univ.

京大生協  
綴葉編集委員会

## 今年の夏は数学の世界を旅しよう

### 数学の世界地図

古賀真輝著  
KADOKAWA



表紙をめくってすぐの部分为本の「そで」というらしい。普通の本では、タイトルが書かれてあったり、まっさらな頁となっている。本書の場合は、世界地図が広がっている。表紙側に同様のものが描かれているが、そでの側は紙面いっぱい描かれており、迫力が段違いである。面食う人もいるかもしれないが、この世界をこれから旅するんだと思うとワクワクしてこないだろうか。本書はガッチガチの数学書ではないし、問題集のように無味乾燥な数式が羅列されることもない。平易な言葉と自然な発想で数学の世界を伝えてくれるガイドブックである。

どんな人が誰に向けて書いているのか？

著者は大学在学時からYouTubeに数学解説動画を投稿し、今や登録者は六万人を超える。修士課程修了後、動画投稿を続けながら中学、高校で教鞭を執っている。本書は六七万再生された同じ趣旨の動画をきっかけに執筆されており、高校生や大学初学年の人が対象だ。雰囲気を知りたければ動画を見てみることをおすすめする。本書を読むための前提知識はほとんど必要なく、多項式やベクトル、積分について知っていれば読み進めることができる。もちろん知らない、あるいは忘れたという人が読めないというわけではな

い。基本的な用語や概念は初めに豊富な具体例と共に説明されており、ゆっくり眺めていけばきっと満足のいく旅ができるはずだ。

どんな旅ができるのか？

本書は数学の三大分野である代数学、幾何学、解析学はもちろん数理論理学や圏論といった数学基礎論、数値解析や離散数学と言った応用数学まで幅広い分野を解説している。各章では基本的な考え方、概念を説明した後、興味深い定理やより深い研究分野、未解決問題が紹介される。数学の世界がどういう枠組みで、どんなものを研究しているかをツアーのように観光できる。しかし、現地の言葉が理解できないと観光の面白みはぐっと減ってしまう。特に、数学の世界の言葉は非常に抽象的に定義され、一読しただけで理解するのは難しい。そこで本書では、数学の専門書では省かれがちな、日常的な具体例を用いた自然な発想で何が抽象化されているか、あるいはなぜそれを定義するとうれしいかが説明される。特に幾何学の章ではこうした本書の持ち味が堪能できる。近傍を住所で説明し、不変量をなぜ考えるのか、様々な不変量がどういうものを表しているかを多くの図や卑近な例で解説してくれる。

唯一の欠点

本書は数学のガイドブックとしては満点だが、更に先に進みたい、自らの足でこの世界を歩みたいという冒険者にとっての大きな欠点の一つだけある。参考文献がないことだ。数学の専門書で適切な選書することは難しく、心が折れる可能性もある。著者のHPで徐々に作成中とのことなので、楽しみに待っていよう。

(茂)

(三二〇頁 税込二四二〇円 6月刊)

## 歴史と歴史家へ向けられた新たな視座

### ベンヤミンの歴史哲学

ミクロロギーと普遍史

宇和川雄著

人文書院



本書は京都大学に提出された博士論文に基づき重厚な研究書である。その完成から遡ること十数年、学部生だった著者は思想家ベンヤミンの言葉と出会う。その後読書会で彼の『歴史哲学テーゼ』を取り上げた時、ある参加者が問うたそうだ。この（既訳では「一般史」とされていた）Universalgeschichteとは何なのか、と。

「普遍史」を指し示す六つの論点

ナチスにより故郷を追われたユダヤ系ドイツ人という素性。現代では必需品となった文明の利器に対する洞察。ヴァルター・ベンヤミンと彼の文章は、今なお絶大な注目を集め、人に何かしらを語らせようとする力を持つ。しかしその晦渋かつ比喩的なテキストは徒な読解に晒されることも少なくない。遺作である『歴史哲学テーゼ』（一九四〇）にしても同様で、著者の宇和川は「上澄みを掬う」事態を避けるため、同稿へと至るベンヤミンの思索遍歴を読み直そうとした。そしてその果てに、「普遍史」の理念が見出された。

全六章から成る考察は、明晰かつ徹底的な一次文献の読解と、ベンヤミン以外の様々な思想家との対決によって特徴づけられる。例えば、ドイツロマン派を扱った彼の博士論文を分析する際はロマン派の代表者フリードリヒ・シュレーゲルの著作が検討され、また思

想家の文獻学への傾倒を意味づける際は、グリム兄弟に遡りその連続性が証立てられる。そのほか形態、寓意、原型、技術と、依って立つ文脈をしかと定めるがゆえに、迷いなき論述が読者を導く。

「些末なもの」なしにはあり得ない歴史

けれども、ここで本書の結論をまとめることは難しい。「普遍史（Universalgeschichte）」の構想を解き明かそうとする著者は、それと並べて彼の「ミクロロギー的方法」にも注意を向ける。それは「神は細部に宿る」という精神に基づき逆説的な思考法である。ベンヤミンの歴史哲学はこのミクロな尺度によるマクロな普遍史の批判、その先にあった。論述を踏まえ「些末なもの」を好む思想家の姿を想うと、論の要となる岩塊の如き文獻読解や他の思想家との格闘と並んで、その間を埋める砂粒のような同時代人の証言が同程度に重要であると感じられ、安直な要約を躊躇ってしまうのだ。

アドルフ・ショーレム、アーレントといった第二次大戦を生き延びた知識人による亡き友ベンヤミンの回想は、実際読解の正当性を裏付けるよう機能しており、論の運びには破綻がない。一次文献を引用する際には、例示を駆使した丁寧な語り直しが印象的である。過去のテキストをそのままに自身の論考へと織り込んでいくその手さばきの鮮やかさは、細部まで読んだ者にしか分かるまい。

歴史は無数の人々の生と死に関する記述であり、その書き手が歴史家である。歴史家が歴史をつくるるとき、過去の人々と同様に歴史家自身も見逃してはならない。その両者を見据えるという点で、本書は多くの人々に届く可能性を秘めている。

（投稿・渡世）

（三三六頁 本体四九五〇円 3月刊）

〈特集〉

## 都市

六甲の長いトンネルを抜けると、新幹線は大阪平野を進んでいく。どこまでも広がる町の、その家の一つ一つに暮らしぶりがあり、人生がある。都市——無数の人々が往来し、出会い、共振する場所。途方もなく広い都市を、同じ時間を共有するだけの、一生顔を合わせることもない他者が埋め尽くしていることに、ただ呆然としてしまう。

そうして車窓を眺めていると、やがて東寺の五重塔が見えてくる。新幹線は大きな右カーブを描きながら減速し、定刻通りにホームに滑り込む。ろうそくの形をした小さなタワーを見上げて、帰ってきたと感じるようになったのは、いつからだろう。

(たいやき)



## 〈都市〉なるもの——その経験の地平——

京都という〈都市〉で暮らすようになって六年目になる。一日にバスが一〇本もないような地方のはずれで生まれ育った評者にとって、大学進学を機に出会った〈都市〉は恐ろしいものだった。時刻表を事前に確認する必要もないほど続々とやってきて大量の人を吐き出す電車とバス。読み方も知らない店と人並みに飲み込まれる四条通。深夜の木犀町の喧噪……。〈都市〉での正しい振舞い方を身につけていないが故の場違いさや戸惑いの感覚が抜け切るまで、数年は要しただろうか。

しかし評者が最も慄いたのは、こうした〈都市〉に対する違和感は、大学で出会った友人の大半にとって自明ではなかったことだ。都会育ちの彼らは〈都市〉の空気を当たり前のように吸って吐くことができていた。〈都市〉なるものはきつと、人間が辿ってきたそれぞれの経歴に応じて異なる形で立ち現れるのだろう。まずは、この社会的空間で人々が取り結ぶ多様な関係がいかに交錯し総体を為しているのかについて考えてみたい。



北田暁大の『増補 広告都市・東京 その

誕生と死』(ちくま学芸文庫)は、〈広告メディア〉消費社会のトライアングルとして〈都市〉を捉え、その変遷を解剖する。〈都市〉自体が広告の舞台となり、我々のアイデンティティ装置として機能した八〇年代。それは他者から「見られて、いる、かもしれない」というパノプティコン的な不安がリアルな時代であった。しかし九〇年代半ばには、過剰なつながりを求める携帯電話というメディアの登場によって、八〇年代の〈都市〉の前提であった既存のマスメディアの論理が溶解する。

〈都市〉が単なる情報アーカイフへと変容した現在、我々の現実(現実)は他者から「見られていない」ことに対する不安——「見られていない」という欲動——に駆り立てられている。

もはや古典の仲間入りを果たした本書はSNSの発達といった近年の論点を含めてはいない。しかし評者は、本書の分析視角の鋭さは現在もなお失われていないと考える。現代の〈都市〉に生きる我々は、インスタなどの広告的メディアに導かれ〈都市〉へ出向き、その光景をまたSNSに上げる。本書は自己増殖する広告メディアと我々の欲望の関係について考える手掛かりになるはずだ。



『ガールズ・アーバン・スタディーズ 「女子」たちの遊ぶ・つながる・生き抜く』(法律文芸

社)は、例えばイルミネーションを観に行く

こと、女性一人だけでは井戸屋へ入りにくい

こと、通勤通学の際に痴漢から自衛しないとい

いけないこと……など〈都市〉に生きる女性の

身近な経験に目を向ける。これらが「当たり前」とされる女性の目に映る〈都市〉は、

おそらく男性のそれとは大きく異なるだろう。

〈都市〉とは単に物質的・客観的な水準のみに存在するものではない。それはむしろ、

私たちが〈都市〉として理解し、実践する、イ

メーシや経験の地平にも広がっている。女性

だけではなく、ぜひ男性にも(男性だからこ

そ!)手に取ってもらいたい良書だ。

さて、〈都市〉の内部を覗き込んで話を進

めきたが、それでは視野が狭くなって全体像



る地方と郊外の未来』(光文社新書)は、フ

ラスト風土化した――全国のロードサイドに

大型商業施設が建設され、マクドナルドのよ

うに均質的な消費空間に地域固有の風土を奪

い去られた――地方と郊外の展望を示す。

〈都市〉と〈地方〉は決して二項対立的なもの

ではない。その内実は多様である。小説家

や建築家を含む総勢一三人による論考は、

「ファスト風土」化を経由した〈都市〉と

〈地方〉の現在地を把握し、将来を構想をし

なるほど、都市はそこに生きる人々の生活

の総体として立ち現れる。一方で、都市は、

人々をある一定の方向に駆り立てるエネルギー

を持つ。それではあなたは、どのような社

会か、どのような生活を望むだろうか? こ

れからの都市について考えることは、あなた

## 何のための、誰のための都市?

ていくための大きな手掛かりになるはずだ。

〈都市〉なるもの。それは時代によって移

り行くメディアや、ジェンダーや出身地など

の属性によって多様に取り結ばれる経験の地

平に立ち現れるものなのだろう。今回取り上

げた書籍はいずれも、〈都市〉に生きて呼吸

をする私たち人間の現実、その経験の質感へ

の感度を増してくれる。(浅煎り)

人々の「目的」になっていないだろうか?

例えば戦後の日本にとって、都市は経済成

長を遂げるためのエンジンであった。人々に

土地や住宅を購入させ、ローンを組ませて経

済市場に組み込む事で、勤勉な労働者を安定

的に生み出した。しかし経済が十分に発達し、

人口は減少してゆく今も、未だに盲目的に

「都市のために働き続ける人」は多い。

本書が提案するのは、「都市をたたむ」都

市計画である。それは縮小していく都市に合

わせて暮らしを変化させつつ、しかし人々が

者には問いかける。都市はそもそも、豊かな生

活をするための「手段」であった。しかし、



しかし当たり前前の潮流となりつつあるこれらの計画が、どのような意味を持ちどこに向かって行こうとしているのか、理解することには意義がある。事業そのものが目的化しないために、都市の大きな力に吞まれないために、私たちはどんな都市を望むのかと、問い続けることの大切さを教えてくれる一冊である。

「集いの場」は都市から消えたのか

より身体的に、実践的に都市の未来を考えるなら、『未来都市はムラに近似する』（彰国社）を読んでもいい。著者は、近代化がムラと都市の分離を推し進めてきたという。そして都市の縮小が進む今こそ、都市を「ムラ」に近づけていくチャンスだと述べる。

かつて日本の都市には、所有の曖昧な空間「コモンズ」が存在した。例えば明治初期の神社を中心とした自然集落では「市」や「祭り」などが開催され、宗教施設を超えたコミュニティのための場所として機能していたのだ。このような、小さな経済圏によって成り立つ地域コミュニティ（＝「ムラ」）を都市に組み込むべきだと著者は主張する。

人口減少により局所的に都市が低密化する「スポンジ化」を逆手に取って、空地を活用した「コモンズ」を生み出せないか。本書は著者の建築家としての試みも紹介される。例えば、東京都江東区の「HYPERMIX」。

上層階にオフィスや居住空間があり、一階部分に都市に向けて開かれた大空間が設けられている。著者は言う、「建築とは、身体的に共同体への参加を感じる『場』をつくる技術である」と。隣に誰が住んでいるかわからない都市的な住居と、人々が集い関係を築いていくムラ的な広場が一つの建物に混在している試みは未来的で、興味深い。

しかし、これまでコミュニティが希薄な都市で生活してきた現代の人々は、果たして自らムラを作れるのだろうか？『商業空間は何の夢を見たか』（平凡社）によれば、そもそも日本的な広場とは、空間的に囲われた場所ではなく、集まる人間の主体的な行動によって立ち現れるものであるという。本書は、政治的・文化的連帯を禁じられ「日本的広場」を失った人々が、消費を媒介して集うよ

うになる過程を描く。

六〇年代までの日本の都市では、政治を中心に人々が集っていた。例えば一九六九年の新宿西口地下広場。紙面いっぱいには広がる、フォークゲリラの写真が印象的だ。車道に溢れかえる人々の熱気が、ムンムンと伝わってくる。現在その場所は「新宿西口地下通路」へと名前を変え、集まることを禁じている。

人々から「集うこと」を奪ってきた代償は大きい。現代の都市は、レンタルスペースのように商品化された空間で溢れている。道端の公園すら禁止事項が増え、安心・安全と引き換えに行きが限定されている。

現在、新宿駅西口では再整備が進められている。名建築を解体して作られるその空間は、私たちにとってどんな未来をもたらすのか。読書をきっかけに、考えてみてはどうか。（荏漢）

## そして、地球全体が都市化する時代に

東京、上海、デリー、ジャカルタ、マニラ

——日本都市が縮小と再編を迫られる一方、世界の都市は空間的に拡大し膨大な人口を吸収している。そんな現代において私たちは都市とどう向き合うか。ここでは都市の「空間性」に着目した近年の都市研究における空間

論的転回の潮流に、その手掛かりを見たい。

資本主義による都市空間の不均衡発展

近代以降、資本主義の勃興と工業という新たな生産様式の誕生によって都市は労働者として大量の人口を抱えるようになり、西洋を中心に多くの大都市が誕生した。

マルクス主義地理学者アヴィッド・ハーウェイが、オスマンによる都市改造計画で知られる十九世紀パリの状況を歴史・地理的視点で記述したのが『パリ モタニティの首都』（青土社）である。本書においてハーウェイは、マルクスの「フェティッシュ（物神）」——商品の交換において物の背後にある社会関係が隠蔽されること——の対象として都市を見る。つまり物質的景観や建物として都市が目前に現れることで、背後にある社会的意味が隠蔽されているということだ。本書はパリにおける空間、金融、労働、文化の変容の過程や連続性に注目し、物質性に隠蔽された社会的意味の解明を試みる。

大量の図版や史料、文学批評から構成される本書だが、根底にはハーウェイの地理的思想が垣間見える。過剰資本の蓄積を避けるため建造環境へ投資が行われ、都市空間が不平等を孕みながら不均衡に発展するという空間的回避の概念に、オスマンによるパリ改造はあてはまる。その意味で本書は、パリの事例研究を通じて、ハーウェイの主張する「資本主義の危機」理論を提示した一冊と言える。

#### 現代都市における空間の再編と複雑化

先進諸国にとって七〇年代は、福祉国家の縮小と工場の海外移転によって都市が変容し、てゆく時代だった。そして八〇年代、サービ

ス経済への移行による都市再編のただなかにあったロサンゼルスを対象にした都市研究群が出現する。政治経済活動と都市の空間性の関係を論じた彼らはLA学派と呼ばれた。

その中でも存在感を放つのが、精肉工場員やトラック運転手といった異色の経歴を持つ地理学者マイク・デイヴィスの『要塞都市LA』（青土社）だ。二〇世紀LAの光と闇が交錯する混沌の都市史が、ドキュメンタリ調の淡々とした筆致で描かれる。表題の章「要塞都市LA」ではゲーテッド・コミュニティの建設を取り上げ、中産階級の過剰な防衛本能により生まれた人権抑圧的な監視と空間的分離が、LAの建築環境を構成していることを明らかにする。ほかにも、ストリートギャングの貧困や失業、郊外化、宗教といった断片的な都市の一面を記述していくことで、（小さな物語が無数に生み出される時代としての）ポストモダン都市LAの全貌が暴かれる。本書で描かれているような、脱工業化とグローバル化の中で多様性と複雑性を増す都市は、今や全世界に広がっているだろう。

#### そして、地球全体が都市化する時代に

最後に都市研究の現在地をちらり。「惑星都市理論」（以文社）は気鋭の都市研究者を



中心に編まれた論文集だ。表題の由来であるニール・ブレンナーらのプラネタリー・アーバンゼーション（PU）研究は、定められた空間的領域を持つ都市という、従来の都市論の枠組みの刷新を目指している。なぜなら都市化は人が集住する領域を超え、農業・工業生産、物流、廃棄物処理などのインフラを担う非都市的な「後背地」にも変容を及ぼし展開しているからだ。本書はPU研究の主題であるスケールとインフラ、更に現代都市研究における一つの中心であるポストコロナル都市論やアクターネットワーク都市論などのトピックについて、最新の議論を紹介する。

本書は都市を理解するための普遍的な理論や知の構築を目的としていない。地球全体が都市化する時代において、経験に裏づけられた認識からボトムアップに都市を思考するための問題提起が、ここになされているのだ。

\*

都市は無意識のうちに我々を内包し、様々な問題もないまぜに、ただそこに存在している。本特集では、都市に生きる人びとや都市を主体的につくることが、都市の空間性といった多様な視点から、都市を捉えようとしてきた。本特集が読者にとって、自らの生きている都市を再考する道標になることがあれば、それが評者一同の本望である。（たいやき）

## 新刊コーナー

どんだん変に…

エドワード・ゴッリー・インタビュ集成

エドワード・ゴッリー著 カレン・ウィルキン編

小山太一／宮本朋子訳 河出書房新社

先月号の『綴葉』

の企画「ゴッリー病

にご注意を！」は、

お読みいただけたた

らうか。まだの方はぜひ。ここでは先の企画

に関連して、絵本作家（と限定はできない

が）のエドワード・ゴッリーという人物に焦

点を当ててみたい。二〇〇三年、ゴッリーの

死の三年後に編まれたインタビュ集が、今

春、装いを新たに出版された。

大のインタビュ嫌いを自称したゴッリー

だが、実状は少し違う。自身の知識と関心の

レベルに見合わない質問に、彼は辟易した。

知識量が膨大であるがゆえに。一度心を掴ま

れると、没頭せずにはいられない性質らしい。

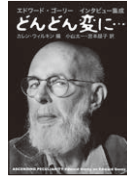
ニューヨーク・シティ・バレエへの偏愛と造

詣の深さが最たる例である。リハ・サルと朝

昼晩全ての公演を観に行ったというのだから

多方面への好奇心は一方で、彼に間断な

い関心を与え続けた。文学への強い愛情も



また然り。「アイデアのたくわえは、今にも

崩れだしそんな新の山ほどある」。だがその

アイデアが結実した彼の作品は、実に意味

不明なものが多い。「できるだけ意味を持たな

いものを書く傾向はたしかにあると思います。

昔から、意味のないものを書くという考えに

魅かれてきたんでね。彼は続ける。自身の読

者層は「たぶん、一般よりも『ソフィスティ

ケート』された人たちじゃないでしょうか

——それがどういう意味かはさておいて」と。

丸眼鏡の奥でニヤリと笑う目と、微かに揺れ

る密林のごとき顎髭が目につく。（はらん）

（二七二頁 税込二七五〇円 4月刊）

## 都会のトム&amp;ソーヤ20

トムvs.ソーヤ

はやみねかおる著

にしけいこ絵 講談社

目が覚める。伸び

をする。歯を磨く。

学校に行く。友達と

話す。いつもの日々。

そこで目を覚ます。あれ、今までは夢

……？ 伸びをした時の気持ちよさも、友達

の笑顔も、おはようの声も、確かにそこにあ

ったのに。じゃあ今見ているのが夢……？



今居る世界がどうして現実だと言えるだろ

う。あなたはそう考えたことはあるだろうか。

私はたまに、今どちらにいるかわからなくな

る。なんだか頭がぼんやりして、この世界は

誰かの見ている夢じゃないかと考えるのだ。

赤い夢。はやみねかおるはこの現実と夢の

あわいをそう呼ぶ。彼の書く物語に通底する

概念だ。『都会のトム&amp;ソーヤ』シリーズも

然り。この三月にとうとう二〇巻目を迎え、

あの頃も今も「子どもたち」をずっと楽しま

せ続けている本シリーズ。「ふつう」だけ

ど並外れたサバイバル能力を持つ内藤内人と

秀才かつ御曹司かつ猪突猛進な魔王創也は今

も変わらずゲーム作りに励んでいる。参加者

に「赤い夢」を見せるようなゲーム作りに。

二〇巻では、タイトル通り内人と創也が対

決する。小学校の同窓会に参加した内人は、

タイムカプセルを探するため山奥の不気味な建

築物に入ることに。しかしそれは創也の実家

である竜王グループの持ち物だった。しかも

侵入者対策に創也が関わっていた！ 内人の

サバイバル能力と創也の罠作りもといゲーム

メイキング能力、どちらが勝つのか？

ゲームの行方は「神のみぞ汗」！ さあ、尋

常でなく楽しんで、恐れぐらい魅力的な赤い夢の

中へ。Good Night, And Have A Nice Dream(黄四)

(二〇四頁 税込一三三〇円 3月刊)



## 文庫の読書

荒川洋治著

中公文庫



文庫が好きだ——  
と、突然愛の告白  
をしてしまったが、  
とにかく私は文庫が  
好きなのだ。まず文庫はポケットに入れて持ち歩ける。だから散歩の相伴にはぴったりだ。散歩に疲れたら、ポケットからすっと取り出して、休憩がてら読み始めればいい。次に文庫はその小ぶりのサイズゆえに、読めば読むほど手になじむ。そして愛着が湧いてくる。それは「私」だけの大切な一冊となる。要するに文庫は、良いこと尽くめなのだ……!

「文庫の読書」と題された本書の「あとがき」には、こんな一節がある——「読み終えたあと、柔らかくなった紙の感触もい。読んだ。確かに読んだ、しっかり読んだ。そんな気持ちになる。それが文庫だ」。本当にその通りだと思う。これを書いたのは、現代日本を代表する文芸評論家の荒川洋治。私と同じく彼もまた、「文庫大好き人間」のひとつりだ。本書は、そんな文庫を愛してやまない荒川によって書かれた、文庫をめぐる選り抜き

のエッセイをまとめた珠玉の一冊である。

国木田独步、葛西善蔵、武田白百合、フーシキン、シュトルム、カルヴィーノ……本書では古今東西の作家が縦横無尽に論じられるが、「荒川マジック」とでも言うべきか、まったく興味のなかった作家でも、荒川の手にかかるとあら不思議、どうしようもなく読みたくなる。たとえばチェーホフの短編「学生」について——「このような小説があるために人は生きていくのだ。そんな気持ちになる」。こんなことを書かれたら、もう読むしかないだろう。本書は読書欲増進剤だ。

(三二〇頁 税込九九〇円 4月刊)

ルネサンス文化講義  
南北の視座から考える澤井繁男著  
山川出版社

本書は、著者澤井の二二年間に渡る講義録をまとめた書である。「ルネサンス文化に親しむ」と題されたその講義は、いわゆるパンキョーの科目であった。澤井は講義後、質問や感想をコメントペーパーに書かされていた。本書の後記には、それが「だんだん

読むに耐えないものに悪化していった。これも時代の趨勢かとも思った」と記されている。澤井は本文でも度々、昨今の学生の質の悪化を憂いている。本書を読めばその憂いにも共感できよう。ルネサンスという深遠なる知の世界を見つめる者には、浅薄な知が氾濫した現代世界は許し難いものに映るのだろう。

講義録とだけあって、各章はコンパクトだが明瞭にまとめられている。さらに、参考資料に邦文文献が挙げられているのもありがたい。全二〇個のテーマには、「天地照応」や「二から多へ」という思想的切り口に始まり、「民衆生活」や「女性蔑視」といった歴史学的視点、さらには「気候変動」や「科学革命」といった、理系学生の方々にも興味深い観点が盛り込まれている。とはいえ、一見すると文学や芸術とは無関係に見えるこれらの事象をも、当時の人々は神の恩寵と罰という観点から解釈し、作品へと落とし込んだというから、やはりルネサンスは興味深い。

また、著者がルネサンス魔術研究の第一人者であるがゆえに、「自然観の推移」と「魔女狩り」の章は必読だ。実態の捉え難いこれらのテーマにはしかし、質と量、都市と農村といったルネサンスという時代を把握する上で重要な対立構造が潜んでいる。(はらん)

(二四〇頁 税込二二〇〇円 4月刊)

## イン／ポライトネス

—からまる善意と悪意

滝浦真人／椎名美智編

ひつじ書房



ある一言を言つた  
言わないか。言つたらば、どの単語を用いるか、文の形はどうするか……。ことばを用いた他者との関わりは選択の連続である。そして、度重なる選択の上に成り立つ発話（または発話しないこと）に含まれる意味を受け手は推論する。このような実際の言語使用に焦点を当てるのが語用論という言語学の一分野である。

「社交的な『ふるまい』と説明される「ポライトネス」に否定の接頭辞を付けたらそれはポライトネスの失敗を意味するのだろうか。否、本書はそれを別次元の行為と捉えている。インポライトネスには感情的で意図的な「失礼」や「悪意」も含まれるのだ。体系的敬語を持つ日本語では、ポライトネス研究が盛んな一方で、インポライトネスについては、本書がその名を冠する書籍第一号だという。言語学に興味を持つ人ならほげい読んでおきたい一冊だ。しかし、本書は一専門分野の學術書に留まる書籍ではない。「言葉の暴力」に

対する本書の姿勢を示す序論は多くの人に読んでもらいたい。続く各論考の語用論的分析からは言語学者のことばの見方が窺える。言語は線状性を持つ。つまり一度発したことばは消えない。だからこそ、たとえ言語学者でなくとも、ことばを分析的に捉える言語学的視点を知ることには意義がある。

しかも本書は面白い。ママ友の会話やテレビの毒舌キャラの発話を分析し、なぜ気分を害するのか、逆になぜ親しみを覚えるのかを語用論的に考える。すると言語の負の側面が一転、創造的可能性がみえてくる。（ひるね）  
(二七二頁 税込三七四〇円 4月刊)

## ゴースト・ワーク

グローバルな新下層階級をシリコンバレーが  
生み出すのをどう食い止めるか

メーリン・デズーラウ著 階級論 龍谷 愛絵



情報技術の発展が  
業務を自動化し、人  
間がやるべき仕事  
(とりわけ単純労働)

は失われていく。ウェアサービスは、クリエイティブな才能を持つわずかな人間によって生み出されている……。本書の綿密な調査は、こうしたイメーシに待ったをかける。

本書のタイトルでもある「ゴースト・ワーク」は、文字通り幽霊のようにAIを陰で支える仕事だ。ワーカーたちは自宅から専用プラットフォームにアクセスし、仕事を探す。そして画像に写る家具の名前を入力したり、SNS上の不適切な画像を選別したり、証明書の顔写真を照合したり、録音の音質を評価したり、動画の音声を翻訳して字幕を作成したりする。現在の「自動化された」プログラムはあまりにも間違いが多く、人間の柔軟な判断力と手作業がなければ成り立たないのだ。

問題は、ゴースト・ワークは情報産業に必要不可欠な仕事であるにもかかわらず、その地位や安定性が著しく低いことだ。彼らは世間からも企業からもまるでプログラムの一部のように扱われ、労働法による保護もほとんど受けられない。仕事環境を改善したり仕事を教えあったりするコストは、ワーカーコミュニティの自助努力に押し付けられている。産業革命の時代には、体躯が小さいからという理由で子供が紡績機械の糸くず拾いに重宝された。こうした「自動化のラストマイル」を担う人々は、新しい技術が世に出るたびに生まれ続ける。AI生成物が話題の昨今だが、「AIが作る仕事」についてもより関心が向けられるべきだろう。（りつち）

(四四八頁 税込二四二〇円 4月刊)

## 「テロとの戦い」の闘い

高岡豊著  
東京外国語大学出版会

二〇〇一年九月一日……信じられない光景が目に見え、飛び込んできた。飛行機が超高層ビルに刺さっているのである。この事件が発生した後に生まれた読者もいるだろうが、この事件のことは誰もが知っている。アメリカ同時多発テロ事件以降、アメリカが主導する「テロとの戦い」が始まった。

『「テロとの戦い」との闘い』とは、本来国家が負うべき責任を外部に転嫁し、「テロとの戦い」として行われている著しい人権侵害や犯罪行為の法的責任が不明確になっている状態のことを指す。特に二〇〇一年以降このように表現されるに至ってしまった背景を、組織ごとの活動変遷に沿って解説している。同時に、それぞれの組織の広報活動についても分析が行われている。組織は国外から活動要員を集めるために、自らの日常生活に関する情報を発信していた。本書にも写真と共に普段の様子が掲載されており、遠く感じるテロリストを少し身近に感じる。また、世界各

地に影響を与えていた組織は、支部の所在地によって生活様式もまるで統一されていない。食卓ひとつを取っても、食材の調達方法から調理方法まで、地域によって多種多様である。この本を手取る以前に、「テロ」や「イスラーム過激派」を説明するイスラームについての専門的な単語や固有名詞などの多さに敬遠してしまう人もいるだろう。評者もその一人である。そのような読者のために、本書ではイスラーム特有の表現や文化などについての小辞書の項目が最後に掲載されており、内容を格段と理解し易くしている。(フランチ) (二四八頁 税込二四二〇円 3月刊)

増補 もつすぐやってくる  
尊皇攘夷思想のために加藤典洋著  
岩波現代文庫

加藤典洋——彼は日本の批評界で特異な位置を占めている。激しい論争を巻き起こした名著『敗戦後論』は、左からも右からも手厳しく攻撃された(普通、攻撃されるとすれば、どちらか片一方からなのだが)。かくいう私も、加藤の立場をずっと掴めずにい

た。左っぽいことを言ったかと思えば、右っぽいことを言ったりもする。いったい彼はどちらの立場に与しているのか——そうした疑問が、私の頭の中でぐるぐる渦巻いていた。しかし、その疑問は本書を読んで解決したように思う。本書には、尊皇攘夷思想の現代的意味を再考した論考や、鶴見俊輔との交流を回想したエッセイなど、加藤がこれまで書き溜めてきた文章が多数収録されているのだが、その中のあるひとつの文章において、加藤はこう書いている——『私は「……」とにかくどんなことが起こっても、これだけはぼくは本当だと思ふ、ということ』が、最後には考えることの足場になるという思いを深めてきました。加藤はつまり、左でも右でもなく、「ぼく」という場所から言葉紡いでいるのだ。既成の立場から発言するとき、その発言はイデオロギーへと凝固せざるを得ない。それゆえ加藤は「立場」というものを峻拒する。ここに加藤の魅力がある。

「ぼく」の感覚を大切にし、そこからものを考えてゆくこと。これは本当に大事な姿勢だと思う。「それってあなたの感想ですかね」という言葉が膾炙する昨今だが、私はそれに対して、「あなたの感想」はとても大切なかけがえないものだと言いたい。(ばや)

(五四二頁 税込一九五八円 2月刊)

# 「ほんもの」という倫理 近代とその不安

チャールズ・テイラー著  
田中智彦訳 ちくま学芸文庫



ほんものという倫理——おそろく聞き馴染みのない概念だろうが、実は既に私達の中にあるものだ。「人様のまねをするのではなく、自分なりのやり方で自分の人生を送ることがこのわたしに求められているのだ」という感覚。この、ほんものを理想として志向する態度が、本書の鍵となる概念なのだ。

政治哲学の大家である著者はこのほんものという倫理に注目して、近代の没落vs.その批判者、という対立構図に切り込んでいく。近代、そして現代には確かに、個人主義と道具的理性の浸透によって、ナルシズムの文化が蔓延している。しかし著者曰く、これは個人主義の背景にある理想——ほんものという倫理——が、墮落し逸脱した形態に過ぎない。彼は自らの立場を、この道徳的理想の価値を無視する批判者からも、また現代文化にのみりこんでいる人々からも区別する。「わたしたちがしなければならないのは、このほんものという理想を回復する作業であり、また

そうすることによってこそ、わたしたちはこの理想の助けを借りて、自分たちの実践を立て直すことができるようになるのです」。

彼はほんものという倫理の全貌を示すため、思想史を辿り、政治や芸術をも題材として芳醇な議論を繰り広げる。そして、近代の不安の原因を紐解き、理想を回復するための実践を呼びかけ続けるのだ。原書は一九九二年に刊行されたものだが、その洞察は現代にも突き刺さる。立場が明確で批判に開かれた彼の議論を伴走者とし、「ほんもの」の価値の源泉を見つめ直してはいかがだろうか。(朝露)

(二五六頁 税込二二〇円 3月刊)

## 生きることの意味を問う 哲学

森岡正博対談集

森岡正博著 青土社



「生まれてこないほうが良かったのか?」という問いがある。デイヴィッド・ベネターによって分析哲学の俎上に載せられ、本書の著者・森岡の同タイトルの著作によって体系的に検討されてきた問題だ。人間は生まれてくるべきではなく、また新たな

命を生むべきではないという思想を反出生主義と言い、俗流化したものを含めると、インターネット上の言論やフィクションの題材として確実に浸透してきている感がある。

本書は反出生主義を含む「人生の意味の哲学」を切り開かんとする著者が、四人の若手哲学者との対話を通じて「哲学すること」「自体に迫っていく対談集である。著者にとつての哲学は、過去の偉大な哲学者のテクストを一字一句解釈することでもなければ、純粹に知的な論理パズルを解くことでもない。「私は生まれてこないほうが良かったのではないか」。生命の哲学とは、「この私の命」を前提とした私的で実存的な問いを抱えたまま、現在や過去の哲学者と真摯な対話を重ねることの内にあるのだ。著者と非常に近い問題意識を持つ評者としては、過去の哲学者の研究を自己目的化するのではなく、己の問いを考える偉大な仲間として過去の作品群を読むという著者の哲学スタイルに非常に強く共感し、これで良いのかとんだか安心した。

例えば反出生主義について明確な答えを得ようとして本書を開くと、肩透かしを食らうだろう。しかし本書の語りは、哲学せざるを得ない問いを持つ読者へ、自分の問いに飛び込む勇気を与えてくれる。

(二二〇頁 税込二二〇円 4月刊)



## 我が身を守る法律知識

瀬木比呂志著  
講談社現代新書

「自分には裁判沙汰になるような問題は起きない」——そう思っている人にご読んではしい新書がある。それが本書だ。

元裁判官で現在は明治大学教授の瀬木比呂志氏が問題の予防・解決法をひとつずつ丁寧に解説する。本書が扱う問題は交通事故、不動産関連のトラブル、痴漢冤罪、離婚や不貞、相続争い、雇用や投資をめぐる紛争、医療訴訟やいじめ、海外旅行など多岐にわたる。

例をひとつ挙げよう。一般人が遭遇しやすく、泥沼化しやすいものに無償契約の使用貸借がある。主に使用期間に関する認識の相違と契約者間の人間関係悪化により問題が生じる。これを未然に防ぐには、契約時に使用期間を定めるのが大事だという。当然の対処法に思えるが、それができていない人が多いようだ。このように他の問題も敷衍してくれる。著者は「実証的で冷徹なリアリズムの不足」ゆえに個人でも社会・国家レベルでも危機管理ができず、問題が発生すると本書で主張する。法律知識を身に付け、リアリズムを徹底し、将来の自分をどうか守って。(前髪)

(二五六頁 税込二一〇〇円 3月刊)

## 物語 チベットの歴史

石濱裕美子著  
中公新書

チベット——平均標高四一〇〇mの広大な地域である。現在は中華人民共和国の中の自治区として存在しており、チベット仏教をはじめとする様々な独自の文化を持つ。最盛期には、その勢威は現在のパキスタンや中央アジアにまで及んでいたため、古代ペルシア文化やインド文化、漢文化、そしてヘレニズム文化なども取り入れながらその文化を築いた。現代の様相からは想像をすることが困難かもしれないが、中国併合以前のチベットは周辺諸国と非常に密度の濃い外交関係を構築していた。八二三年には唐との講和によって国境を画定し、その際に刻まれた唐蕃会盟碑は現在も古都・ラサに残っている。

チベットが中国に併合を余儀なくされた一九五一年以降の歴史を概観する機会はそのなりに多い一方で、本書のように、これ以前のチベットの歴史に触れる機会は非常に限られている。チベット自治区における人権問題に触れる際、そして近年話題になっているチベット文学などを読む際にも、基礎知識として一冊読んでおいて損はない。(フランチ)

(二八八頁 税込九九〇円 4月刊)

## 「死にたい」と言われたら

自殺の心理学  
末木新著 ちくまプリマー新書

著者によれば深刻に自殺を考えなことがある人は人口の二〜三割にのぼるという。「死にたい」と思うことはそれほど珍しいことではないのだ。しかし、「死にたい」という思いを抱いた時、あるいは相談された時に適切な対処ができる人はどれほどいるだろう。

本書は自殺という複雑な現象を誠実に分析し、個人単位、社会単位での実践的な自殺予防を解説する。個々人の自殺の原因は分らないが、統計的な調査から自殺を引き起こす様々な要因が浮かび上がってくる。これらをまとめた「自殺潜在能力」、「所属感の減弱」、「負担感の知覚」という三つの要因を主軸に具体的な予防策が提案される。

本書の特色として、自殺を絶対悪だと拒絶せず、自殺は悪なのかと問いつ直す点がある。自殺の功罪を整理し、予防すべきでない自殺の在り方を提示する。一方で、現実の自殺はそうした理想的なものではない。こうした考察は自殺予防の必要性だけでなく、自殺を救済として神聖視したり、逆にタブー視する姿勢を崩し、冷静な視点も与えてくれる。(筏)

(一九二頁 税込八八〇円 6月刊)

## 若者による犯罪、その背景には――

「闇バイト」が連日世間を騒がせている。だが、闇バイトとは一体何か、なぜ闇バイトに手を出すのか、なぜ根絶できないのか……。

### ◆闇バイトの実態◆

こうした疑問を暴くべく、犯罪者の視点から事件を描いたのが『ルボ 特殊詐欺』（ちくま新書）である。不特定多数から現金等を騙し取る特殊詐欺の一種――闇バイトに手を染め、実行役を担うのは金銭的困窮者等だ。彼らは勤務初日に住所や顔写真といった個人情報等を奪われ、家族を人質に取られ、脅され、闇バイトの継続を強要される。「とりあえず僕のことを捕まえてくれないですかね」「もつずっと、怖くて、怖くて……。でも、家族を守りたい……」といった陳述が本書の随所に見られ、憔悴し切った姿が目につく。実行役は現行犯等で捕まるが、暴力団が担う指示役は実行役に身元を明かさなため捜査の手が及ばず、捕まらない。近年の法改正により従来の資金源を断たれた暴力団にとって、実行役を新たに調達すれば資金を得られる特殊詐欺は渡りに船である。

### ◆立ち直らせるための少年法◆

ところで、特殊詐欺で立件された者の七割が三〇歳未満で、全体の約二割を一〇代が占めることをご存じだろうか。罪を犯した一〇代には少年法が適用される（成人年齢引き下げに伴い一八・一九歳は「特定少年」という位置づけになったが少年法適用対象）が、この法律の入門書に『少年のための少年法入門』（旬報社）がある。罪を犯した場合どうなるのか、図やケーススタディを用いて解説する。必要な教育やさまざまな支援を通して、



罪を犯さない大人に成長してほしいという理念を基に少年法は作られている。よって、刑罰を主な目的とし、二〇歳以上に適用される法律とは性質が異なる。また、本書は「逮捕」といった聞き馴染みはあるが意味を深くは知らない用語も平易な言葉で説明し、これを読むだけでも学びがある。

### ◆加害者であると同時に被害者でもある非行少年◆

これまでご紹介した本よりも、非行少年自体に重きを置いているのが『非行少年の被害に向き合おう』（人文書院）だ。事件概要や生育環境、下った判決、実践した支援とその後



の経過を事例ごとに詳説する。本書によれば、非行少年の多くは虐待や性被害に遭っており、深く傷ついた心身を癒やす時間と環境が彼らには必要だ。傷が癒えれば自省し、立ち直ることができる。しかし、厳罰化を求める現状ではそうした措置を取れない。非行を少年の SOS と捉え、救いの手を差し伸べ、更生する可能性――「可塑性」を信じ、少年法の厳罰化を早急にやめよう。著者らは社会に憤慨し、嘆願する。

\*

京大の宇治グラウンドのそばにある宇治少年院跡地を、私は横目に通り過ぎたことがある。当時の私のように、若者をはじめとする社会的弱者が抱える数多の問題を今の社会は素通りしている。犯罪を許してはならないが、著者らが指摘するように、犯罪の背景には弱者を困窮状態に追い込む環境や社会構造がある。それを鑑みず、犯罪者になる前に被害から救おうとせず、罪を犯した事実へのみに注目する現状は適切だろうか。読者諸君と考え続けたい。（前髪）

## わたし、境界線

今回は、線がシンブルで美しい漫画を。それでは早速。  
★『A子さんの恋人』一〜七巻

A子は二九歳の漫画家。彼女は大学生の頃から七年付き合ったA太郎との関係解消に失敗したままニューヨークに渡り、そこでアメリカ人の彼氏A君ができ、プロポーズされ、返事を保留にしたまま日本へ帰国。彼女は一体どちらを選ぶのか。



簡潔に言うところ三角関係の話なのだが、本作には重要な特徴がある。その一つが、登場人物の大半が「名前を失くしている」こと。本作では人物の名はアルファベットまたは平仮名で表記される。アルファベットや平仮名で記される名は、酷く固有名性が低い。つまり本作の人物達は置き換え可能な存在として描かれていると言えるだろう。これは彼らが「固有の名前を取り戻す」物語なのだ。

特徴の二つ目は、「自分と相手の境界が消える恐ろしさを描いている」こと。作者はA子とA太郎の関係と、A子のデビュー作をリンクさせ巧みに表現する。A子は大学四年の時描いたデビュー作に縛られ続けている。それは実はA子とA太郎の話を抽象化した物語。A太郎はA子の漫画の手伝いをしていた際、A子の描く線そっくりの線を描いた。まるでA子のコピーのように。A子は恐怖を覚える。コピーに追われるオリジナル。彼女は思う、「この人おかしいんじゃないか?」でも彼女も知らずの内彼の影響を受けている。お互いに相手に強く憧れ、境界線が消えてきていたのだ。ただ二人が違うのは、A子は「あなた」として私は私ではいられない」とA太郎を置いて渡米したのに対し、A太郎は「君」として僕も僕は変われな

い」と大学時代の部屋から出られず彼女を待ち続けた所。デビュー作はそこで終わり。沖まで泳いだ彼女は、海の底に沈みかけている彼を救い出そうとデビュー作の続きを求めていたのだ。そういうことが徐々に明かされる。誰かとしても自分は自分であること、A子は英子だしA太郎は永太郎であること。その上で大切な人と一緒に生きていくには。もがき日米を股にかけ逃避しつつもデビュー作にピリオドを打った七巻は涙が溢れた。彼らの未来に光あれ。

★『ひとりの夜にあなたと話したい』10巻のこと』

もうすぐ夜が来る。街が青く染まる時間。

その束の間が、好きだという。世界が美しく見える気がするから。そうだね、一瞬だけ別の世界と交わる幻想的な、どの時間より他の生き物との境界が狭まる気がするこの時間が、私も好きだよ。作者



カシワイさんの優しい絵と言葉が詰まった読み手への手紙のような本。「あなたと話したい」、読み手の言葉を待っていてくれると伝わってくるから、対話しながら読んでしまおう。うれしい夜も、さみしい夜も、落ちつかない夜も、眠れない夜も、この本があればきっと大丈夫。一緒に大切な記憶の欠片を磨いたり、遠くの海のどん底に眠るクジラの骨を想ったり、あてもない夜の散歩に出たり、しようよ。

一本の線とて、同じ物はない。人肌を感じる柔らかな線、NYのネオンのようなアーティスティックな線、水色の風のような涼やかな線。どの一本も代わりはない。それらが合わさり、わたしはできている。かけがえのない、わたしをつくる境界線。

(黄丹)

## 編集後記

ご挨拶が遅くなりました。6月号から編集委員として参加している筏です。精々数学の証明程度の文章(?)しか書いてこなかった私ですが、今年度からは綴葉の書評のおかげで文章を書く機会に恵まれています。綴葉の編集委員には理系を専門としている方が少なく、自身の専門性を活かして数理系の書評を増やしていけたら良いなど考えています。

さて、私は名前を考えるのが苦手で、特に絶えず変化していくものに名前を与えるのが非常に苦手です。ゲームで名前を決めるのでさえ苦悩していた時期があります。名前に意味やストーリー性を込めると、名付けた対象の変化を制限してしまうような気がするからです。しかし、名付けを放棄し、代名詞や種族名、番号で呼ぶというのはあまりにも非人間的なふるまいです。そこでほとんど意味の無い、適当に目についたものを名付けるようにしています。筏もそうです。春に編集委員として誘われた時は白川疎水の桜を楽しみにしていたので、花筏という単語を知り、花と言う柄でもないなどと思い、筏を選びました。

一方で綴葉という表題は非常にしっくりきており、名前負けしているような印象も受けません。このまま綴葉が綴葉たれるよう、頑張っていくのでよろしくお願いします。(筏)

## 当てよう! 図書カード

お盆の風習は地域によって特色があって面白いですね。京都では五山の送り火が有名ですが、私の出身地である広島では、他ではあまり見られないあるものをお供えします。お墓が非常にカラフルになるのですが、このあるものとは次の内どれでしょう?

1. 盆行燈      2. 盆灯籠
3. 盆風鈴      4. 盆風船

(筏)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは9月15日です。



《5月号の解答》 5月号の問題の正解は、3. のエチオピアでした。左京区元田中にある「旅の音」という喫茶店のエチオピアのアイスコーヒーは絶品ですので、この夏には是非一度足をお運び下さい。図書カードの当選者は、うりこさん、とんとさん、こゆきさん、土曜の朝さん、のきなネコさんの5名です。当選おめでとうございます。(浅煎り)

## 読者がらひつゐ

○春から京大にやってきたのですが、生協で『綴葉』を目にした瞬間「わ! 京大だ!」と実感が湧いてテンションが上がりました。これからも楽しみにしています。

(人間・環境学研究科・なつこ)

——『綴葉』で京大らしさを感じていただき光栄です! 編集委員も人文学から科学まで多種多様な京大生がおります。ぜひ『綴葉』とともに素敵な京大ライフを!

○先日Aマッソのオンラインライブ「滑稽」を観ました。笑いの中に社会への風刺や人生の滑稽さが溢れていて、洞察力の深さを感じました。加藤さんが文章を書かれていることを初めて知り、興味が湧いています。

(しゅん)

——読者のなかにも同志の方がいらっしゃるのでは……! 書評を書いた身としても報われる思いです。彼女の今後の活躍に期待!

○毎月、表紙の写真を楽しみにしています

(人間・環境学研究科・いんくに)

——写真担当の委員も大変喜んでおります! 季節や特集に合わせ、毎回魅力的な写真を撮ってくれる彼はまさに『綴葉』の顔そのものの。来月号の表紙もお楽しみに! (浅煎り)